

朝鮮の遣米使節団における通訳の問題について

－1883年の遣米使節団の例を中心に－

李漢燮(高麗大学校)

1. はじめに

本稿は、1883年に朝鮮政府が派遣した使節団がアメリカ側とどのようにコミュニケーションをとったかを明らかにしようとするものである。

韓国人とアメリカ人との接触や交渉においてぶつかる問題の一つは言語間の障壁であった。当時両国には相手国の言葉を理解する人がいなかったからである。その例を二つあげる。1853年1月、43人を乗せたアメリカの捕鯨船South America号が韓国の釜山の近くに漂着した。朝鮮の役人たちがアメリカの船に上がって様子を見たらこれまで見たことのない変わった姿をしている人が乗っていて、韓国語や日本語、中国語で聞いても言葉が全然通じなく、漢文で筆談をしようとしても通じなかった。アメリカ人も必死で「We are from America」と叫んだが朝鮮の役人が分かるはずがなかった。彼らは43人は全員救出され、北京を経由無事帰国した。当時朝鮮の役人はアメリカ人が叫んだ「We are from America」を聞いてアメリカを「里界」と記録している。[注1](#))次は1883年美朝修交条約が結ばれる時の話である。1882年5月12日R.W.Shufeldt提督が美朝修交条約を結ぶため仁川の沖に来航した時、R.W.Shufeldt提督は朝鮮側とのコミュニケーションのため二人の中国人通訳を連れて来た。中国語と韓国語を使って英語を通訳するためであった。アメリカ側が朝鮮側に発話をする時は、まず中国人通訳に英語で話の内容を説明し、これを聞いた中国人通訳が中国語ができる朝鮮の通訳に中国語で内容を伝え、朝鮮側の通訳は朝鮮の役人に韓国語で話の内容を伝えるといった複雑なプロセスを経っていたのである。

アメリカ側	↔ 中国人通訳	↔ 中国語のできる朝鮮の通訳	↔ 朝鮮側の役人
(英語)		(中国語)	(朝鮮語)

韓国側とのコミュニケーションに困ったR.W.Shufeldt提督は、条約が成立した後、朝鮮側に英語教育の必要性を強調し、アメリカに留学生を派遣することを要望した。

1882年美朝修交条約が結ばれた後、翌年朝鮮政府はアメリカに遣米使節団を派遣することになるが、この時表面に現れた問題の一つもアメリカ側とのコミュニケーションをどうするかという問題であった。別に方法がないことに気づいた朝鮮政府は、朝米修交条約を調印する時アメリカがとった方法、つまり中国語と韓国語を使つての二重通訳方法をとる方法を考えてアメリカ側とのコミュニケーション問題を解決しようとした。

本稿では、西洋語の通訳可能者がいなかった当時の朝鮮政府が外交上の交渉においてどのような方法で外国側とコミュニケーションをとったかを、1883年 遣米使節団の例をあげて見てみることにする。

2. 遣米使節団の派遣

ここでは、朝鮮の政府が1883年アメリカに使節団を送った経緯及び遣米使節団の構成などについて考えてみることにする。

2.1. 使節団の派遣の経緯

2. 1.1. 19世紀末における韓米関係

19世紀半ば以前までの朝鮮と西洋との関係は、西洋との接触の機会も少なく、また朝鮮の鎖国政策などで平穏を保っていた。ところが1850年代以降は、西洋諸国の東洋進出政策や朝鮮政府のカソリック迫害などで緊張が高まった。1866年7月には貿易を求めて大同江を遡ってきたアメリカの船「General Shurman号」が平壤で焼かれ [注2](#)、同年8月と9月にはフランス軍が二回に亘って攻

めてきた。また、1871年にはアメリカ軍が朝鮮に來侵し 注3)、朝鮮側と小規模の戦争を行うなど緊張が高まっていた。これらの一連の事件が重なって朝鮮の西洋嫌いは益々深まり、鎖国政策はさらに強化された。

アメリカとの関係は、論文末尾の＜韓美関係年表＞から見られるように、1860年代まではアメリカ捕鯨船が何回か韓国近海に漂流することはあったが、国と国との間には何の問題も起こらなかった。しかし「General Shurman号事件」やアメリカの朝鮮への來侵があつてからは両国の関係が悪化した。アメリカの対朝鮮政策は朝鮮を開港させることだったので、1871年の韓米戦争の後も朝鮮に対して開港と通商を続けて求めた。時には中国や日本政府に頼んでアメリカ側が朝鮮との国交樹立を希望していることを朝鮮に伝えてくれるよう、働きかけた。

1878年4月アメリカ上院議会の海軍委員長Aaron A. Sargentは朝鮮政府の日本への開港に刺激を受け、朝鮮との修交交渉のための使節団を派遣すべきだという決議案を出した。彼は朝鮮を開港させる必要性について次のように説明している。一つ目は経済的理由である。アメリカの貿易の範囲を拡大し、農産物や工業製品の販売市場を増やすには朝鮮を開港させるのが必要だという考え方である。二つ目は政治的理由で、ロシアの南進政策を阻止するためである。三つ目は、韓国近海でのアメリカ遭難船を保護するためである。四つ目は文化的理想を実現させるためである。アメリカと韓国が国交を結べばアメリカの優秀な青年を朝鮮半島に進出させ、朝鮮の開化を助けることができるだろうという理由であつた。注4)

しかし、朝鮮とアメリカが国交を結ぶようになるには1882年まで待たなければならない。

2. 1.2. 韓米修交

1876 年日本に強制的に開港させられた朝鮮は世界情勢の厳しさに気づき、外国との交流の必要性を感じ始めた。1878 年 12 月 Richard W. Thompson 海軍長官は前述した Aaron A. Sargent 議員の法案に従って R. W. Shufeldt 提督を朝鮮に派遣し、日本の仲裁などを得て朝鮮と開港の交渉をするようにした。R. W. Shufeldt 提督は 1880 年 4 月釜山に到着して「東萊府使」に会い、アメ

リカ側の意思を伝えたが朝鮮の政府に断られ、開港の交渉は失敗に終わった。朝鮮側がアメリカと修交してもいいという気になったのは 1880 年の末になってからのようである。1880 年 10 月日本に派遣された朝鮮の修信使金弘集(1842－1896)は駐日清国公使館参贊官黄遵憲から『朝鮮策略』という書物をもらって帰り、国王高宗に献上するのであるが、『朝鮮策略』で黄遵憲はロシアの南進政策の危険性を論じ、これに対応するに朝鮮は「親中国、結日本、聯美邦」すべきであると主張した。『朝鮮策略』の内容を検討した朝鮮の政府にはこれ以上鎖国政策を続けることはよくないと考える人が現れた。時折日本の仲裁による朝鮮の開港を恐れていた中国政府も朝鮮にアメリカとの修交を進めた。北洋大臣李鴻章は朝鮮の領中枢府事李裕元に手紙を送り、中国は朝鮮がアメリカと修交をすることに賛同しているということを伝え、また美朝の修交交渉を仲裁する意思があることを言明した。さらに李鴻章はアメリカ側にもこの旨を伝え、朝鮮の開港において中国が影響力を発揮する意思があることを表明した。アメリカ政府は 1881 年 7 月 R. W. Shufeldt 提督を駐清国公使館武官として任命し、また同年 11 月 14 日には R. W. Shufeldt を「朝鮮特命全権大使」に任命して朝鮮との交渉に乗り出すようになった。この時アメリカ政府が R. W. Shufeldt に下した訓令は次の通りである。

- 朝鮮の全権代表にアメリカ大統領に国書を伝えること。
- 朝鮮と遭難した船員を救難する協定を結ぶこと。
- 通商の権利を確保すること。
- 領事裁判権及び朝鮮で自由に旅行する権利を確保すること。
- 外交使節を交換すること。

こうして朝鮮の開港についての交渉は1871年7月から始まるわけであるが、実際の交渉においては朝鮮は直接交渉の対象から外され、R. W. Shufeldtと李鴻章との単独交渉の形で進められた。そして「朝美修交条約」は1882年5月22日仁川で調印された。

2. 1.3. 外交使節の派遣

「朝美修交条約」が締結してから一年後(1883年)5月アメリカ政府はLuvius H.Footeを駐韓アメリカ国特命全権公使として任命した。Foote公使は当時東京で英語の勉強をしていた尹致昊を通訳として雇い、朝鮮との通訳の問題を対応しようとした。ところが尹致昊の英語力がまだ十分ではないことを知ってから、日本政府に協力を求め、井上馨外相の秘書をしていた佐藤修一郎という日本人を臨時通訳として採用してソウルに連れてきた。この佐藤は3ヶ月間ソウルに滞在してから日本に戻った。1883年5月19日米朝間に条約の批准文書が交換され、歴史的な米朝間の条約は正式に成立した。

Luvius H. Foote公使は条約成立後ただちにソウルの中心部にある「貞洞」にアメリカ公使館を開設した。相互主義の原則を尊重するなら朝鮮政府は当然アメリカに公使館を置くべきであった。ところが当時の朝鮮実情はアメリカに公使館を置く経済力をもっていなかった。このような朝鮮の事情を理解したFoote公使は、朝鮮の政府にアメリカに常住の公使館を置くより、取り合えずアメリカに使節団を派遣したらどうかという提案をするようになる。他に方法がないということを感じた朝鮮政府はFoote公使の提案を受け入れアメリカに外交使節団を送ることを決めるが、これが本稿で問題にする「遣米使節団」なのである。

2.2. 使節団の構成

2.2.1. 遣米使節団の派遣に伴う諸問題

1883年7月5日Foote公使は朝鮮の国王高宗を謁見し、朝鮮国が外交使節団をアメリカに派遣するならアメリカ政府は心から歓迎するだろうといい、使節団の派遣を公式的に提案した。これを受けて国王高宗は7月9日使節団の派美を決定するのであるが、実際の派遣の準備をする間に使節団の派遣にはいろいろな問題があることが分かってきた。まず問題になるのは西洋諸国との外交関係を始めて開いているので近代的な外交の慣例が分からないということである。次に問題になるのは、使節団の中に日本や中国以外西諸国に行った経験者がいなく、アメリカへまで行く交通の手段を持っていないということである。もう一つの問題はアメリカ側との意思疎通の問題であっ

た。アメリカへ行く使節団は朝鮮国の国書をアメリカ大統領に渡さないとならず、また様々な交渉をしなければならない。このような重要な任務を果たすには有能な英語の通訳が必要だった。ところが朝鮮には英語を自由に使える者が一人もいなかったのである。

朝鮮側は以上のような問題をアメリカ側と話し合い、次のような方法を考えた。まず近代的な外交の慣例などについてはそちらの方面に詳しい外国人を雇い、助言を求める。アメリカまで行く方法や交通の便はアメリカ側に協力を求める。アメリカ側も朝鮮側の考えに賛同し、使節団の安全とアメリカへまでの案内、交通の便の手配を協力することを約束した。使節団の派遣と関連しLuvius H. Foote公使はアメリカの駐日公使J.A.Binghamに書簡を送り、アメリカまで朝鮮の使節団を案内する人を一人推薦してくれるよう頼んだ。これを受けてJ.A.Binghamは日本で適任者を探すわけであるが、候補に挙がっている Payton Jourdanと Percival Rowelのうち、日本政府が好意を示していたRowelを適任者として推薦した（朝鮮側では Payton Jourdanを希望したという）。これで Percival Rowel（朝鮮名：魯越）は朝鮮の遣米使節団の参贊官（Foreign Secretary and Counsellor）という肩書きで雇われ、使節団のメンバーとなる。Percival Rowelについては後から述べることにする。

一方、英語の通訳の問題は、中国人英語通訳を雇って韓国語と中国語を使った二重通訳をするといった複雑な方法を採用することにした。当時朝鮮には北洋大臣李鴻章の推薦で来ているドイツ人 Paul G. Möllendorff（朝鮮名：穆麟德）が朝鮮政府の外交顧問として活躍していたのだが、この Möllendorff が朝鮮に赴任するとき中国から連れてきた呉礼堂という人が仁川の税関で英語の通訳として働いていた。朝鮮政府 Möllendorff の推薦でこの呉礼堂を遣米使節団の英語の通訳として採用した。中国人英語通訳の採用には中国語が話せる韓国人通訳の選抜が前提条件となり、これに合わせて高永喆という中国語通訳が使節団に加わった。

2. 2.2. 遣米使節団の人選

遣米使節団の人選において、団長（全権大臣）には当時朝鮮政界の実力者であった閔泳翊が

選ばれ、全権副大臣には洪英植、従士官には除光範、随員には兪吉濬、高永喆、邊燧、玄興澤、崔景錫などが選ばれた。この時選ばれた遣米使節団員をまとめると＜表―1＞のようになる。

＜表―1＞ 遣米使節団員の氏名及び役目

役目	氏名	備考
団長(全権大臣)	閔泳翊(Min Yeong Ik)	特命全権公使(Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary)
副全権大臣	洪英植(Hong Yeong Sik)	Vice Minister
従士官	除光範(Seo Kwang Beum)	Secretary
随員	兪吉濬(Yu Kil Jun)	Attaché
随員	邊燧(Pyeon Su)	Attaché
随員	高永喆(Ko Yeong Chul)	Attaché(中国語通訳)
随員	玄興澤(Hyeon Heung Taek)	Attaché(武官)
随員	崔景錫(Che Kyeong Seok)	Attaché(武官)
通訳	呉礼堂(Woo Li Tang)	Interpreter(中国人英語通訳)

これらの人選は貫録や経験、業務能力、言語面の配慮などが考慮された人選であると思われる。遣米使節団が日本に着いてからはPercival Rowelが 外国参贊官及び顧問(Foreign Secretary and Counsellor)の資格で使節団に加わるわけであるが、ここで新しい問題が表れた。9名の使節団を案内しアメリカまで往復するには大変な通訳の需要が発生するということであった。また案内役は通訳だけではなくアメリカ人との日程の調整、通過する各地での観光や視察にも対応しないといけない。使節団の中には英語の通訳(呉礼堂)が一人入っているがこの一人だけでは対応できないと考えたPercival Rowelは、個人的に交流のあった宮岡恒次郎という英語の堪能な日本人を秘書として雇って使節団の非公式的随員とした。これで遣米使節団の人数は宮岡恒次郎を入れて11人となった。

外国参贊官及び顧問	Percival Rowel	外国参贊官及び顧問 (Foreign Secretary and Counsellor)
Rowelの個人秘書	宮岡恒次郎(Miyaoka Tsunejiro)	Interpreter(日本人)

遣美使節団の規模はほんの11名に過ぎないが、使用言語は英語、中国語、日本語、韓国語など四つの言語を使うという複雑な使節団であった。

2.3. 使節団の日程及び歴訪コース

次は遣米使節団が通ったコースを往路と復路に分けて詳しく見てみることにする。

2. 3.1. 往路

遣米使節団は、仁川から横浜まではアメリカの軍艦Monocacy号に乗って行き、商船Arabic号で太平洋を渡った。San Franciscoから目的地 New Yorkまでは列車を利用した。使節団の主な日程をまとめると次の通りになる。

1883年7月16日 アメリカの軍艦Monocacy号に乗り、済物浦(今の仁川)から長崎へ。長崎から郵便船に乗り、横浜に向かう。使節団の人数は9人。横浜に着いて約一ヶ月間東京に滞在する。東京にいる間に Percival Rowel 参贊官と通訳宮岡恒次郎が使節団に加わる。

8月18日 商船Arabic号に乗り、アメリカへ向かう。

9月2日 San Franciscoに到着

9月4日 Central and Union Pacific Railwayを使ってChicago到着。ここで南北戦争の英雄Philip H. Sheridan将軍の迎接を受ける。

9月15日 Washington D.C到着(宿舎は Arlington Hotel)

9月17日 国務部Davis次官補の案内で New Yorkへ

9月18日 朝鮮の国書を Chester A. Arthur大統領に渡す(Fifth Avenue Hotel)

国書を渡してから同日Bostonへ行って貿易展示館などを見学

9月20日 Wolcott Farmなどを見学

9月22日 Boston市長を訪問。Chester A. Arthur大統領に別れの挨拶をするため

Washington D.Cへ向かう

9月29日 国務部を訪問、長官と会談をする。ここで朝鮮への顧問の派遣を要請。

10月12日 Chester A. Arthur大統領に別れの挨拶

11月19日 帰国

2. 3.2. 復路

復路の時は使節団が二つのグループに分かれて帰国した。第一グループは1883年11月19日

New York港を出発し、ヨーロッパを經由して帰国した。第二グループは1883年10月6日

Washington D.Cを出発し、1883年12月21日に帰国した。

第一グループ：関泳翊、除光範、邊燧、アメリカ人George C. Foulk

1883年11月19日軍艦とTrenton号でNew York港を出て大西洋を渡り、ロンドン、パリ、

カイロ、ローマ、インド、シンガポール、香港を經由して1884年6月2日に帰国。

第二グループ：洪英植、Percival Rowel、崔景錫、玄興澤、高永喆、呉礼堂、宮岡恒次郎。

1883年10月6日大陸横断汽車で San Franciscoまで走り、太平洋を渡って、日本を経

由し、1883年12月21日に帰国。

2. 3.3. アメリカに残った人

遣米使節団は1883年11月19日帰国するのであるが、随員兪吉濬は帰らないでアメリカに残り、朝鮮政府最初の国費留学生となる。兪吉濬は Percival Rowelから東京大学の教授を歴任したことのある生物学教授Edward S.Morseを紹介してもらい、しばらく Morse教授の個人指導を受けたが、1884年9月Morseの斡旋で私立高等学校Dummer Academyに入学する。[注5](#))しかし同年12月国内

で政変(甲申政変)が起こったことを知り、高等学校を卒業しないまま帰国してしまう。兪吉濬にとっては一年あまりのアメリカ留学であったが彼は1885年の時点で韓国人としては最も英語力を持っている人になっていた。

3. 使節団員の外国語能力

ここでは遣美使節団各個人の外国語能力について見てみることにする。遣美使節団に参加した人の中には帰国後、英語や中国語、日本語などの外国語能力を身につけて上達した人がいるが、ここでは1883年7月アメリカへ出発する前までの外国語能力を考察の対象にすることにする。

3.1. 個人別能力

3. 1.1. 閔泳翊(1860－1914)

閔泳翊は1877年の科挙(文科丙科)に合格していて漢文に長けていた。1882年10月から日本を3ヶ月間訪問したことがあり、1883年1月から4月までは中国に滞在したことがある。 *New York Herald* の1883年9月28日の記事によれば、アメリカ人通訳が日本語で話した内容を従事官徐光範が韓国語に訳したが、閔泳翊はアメリカ人通訳の日本語を理解していたという。これを見ると閔泳翊はかなり日本語の能力があったと思われる。中国に3ヶ月間滞在したことを考えると初歩的な会話をある程度理解した可能性があると思われる。閔泳翊は1885年11月から数年間香港で逃避生活をしたので20代の後半からは流暢な中国語が話せたと考えられる。

3. 1. 2. 洪英植(1855－1884)

洪英植は領議政洪淳穆の息子で、名門家の出身である。父洪淳穆は保守派の中心人物であったが、息子の洪英植は開化派に属していて、政治的には親子が別の道を歩んでいた。幼い時から伝統的な漢文の教育を受け、1873年に行われた科挙の試験に首席合格した秀才である。1881年1月朝鮮政府が日本に派遣した視察団の一員として参加し、3ヶ月間日本の陸軍制度を視察したことがあるので相当の日本語の能力を持っていたと考えられる。

3. 1.3. 除光範(1859—1897)

除光範は参判除相翊の次男で1880年の科挙に合格し、自らも法務大臣にまで出世した人である。若いころから開化関連書籍を読み、開化派の一員となった。アメリカに行く前、二度日本に行っている。最初は1881年12月朝鮮政府が日本の動きなどを探るため金玉均を日本に派遣するとき金玉均の随員として渡日した時であり、この時は1882年5月まで5ヶ月間日本に滞在している。二回目は1882年9月特命全権大臣朴泳孝が渡日する時、従事官として参加し、1883年3月まで6ヶ月間日本に滞在した。日本滞在期間は合わせて1年1ヶ月で、ほとんど自由に日本語が使えたと思われる。ただし、アメリカへ行く時まで英語を覚える機会はなかった。除光範は1884年の若手グループのクーデタに参加し、日本を経由してアメリカに亡命している。亡命中英語を覚え、1889年アメリカ市民になる。日清戦争後いわゆる開化派が執権した時、朝鮮に戻り(1894年12月)法部大臣になるが、6ヵ月後法部大臣をやめ、駐米全権公使としてアメリカに赴任している。1896年8月政治的な理由で解任されてからアメリカに再び亡命した。駐美全権公使の在任中、韓国人のアメリカ留学を助け、貧しい留学生の面倒を見たことも知られている。

3. 1.4. Percival Rowel(1855—1916)

駐日アメリカ公使John A. Binghamの推薦で東京から遣美使節団に加わった人で、1855年3月Bostonで生まれた。ハーバード大学の物理学科出身で、旅行が好きで若い頃からヨーロッパと中東地方を旅行しており、1883年春日本を旅行した。10年間の日本滞在中日本の茶道や神道、日本庭、美術、文学などに興味を示し、*Soul of Far East*, *Occult Japan*などの著書を残した。語学に才能があって短期間で日本語を自由に使いこなせたという。[注6](#)しかし、遣美使節団に加わった時は日本に来て数ヶ月しか経過していないので日本語を自由に使えたかどうかは疑問である。宮岡恒次郎を個人秘書として採用し、日本語と韓国語による英語の二重通訳をさせたのもその事実を裏付けている。遣美使節団が帰国するとき副全権大臣 洪英植に随行して朝鮮にも来ている。韓国語は全くできなくて、4ヶ月ぐらいの朝鮮滞在中はLuvius H. Footeの通訳であった尹致昊(1865—1945)が英韓両語の通訳を担当したという。

3. 1.5. 兪吉濬(1856－1914)

兪吉濬はソウル生まれで、幼い時から漢学を習い漢文に長けていたが、科挙の試験は受けなかった。若い頃から開化思想に引かれ、開化派の一員となった [注7](#))。1881年1月朝鮮政府が日本へ視察団を送った時、魚允中の随員として参加する。視察団の任務が終わってから福沢諭吉が経営していた慶応義塾に入学し、福沢の家に寝泊りしながら福沢から直接指導を受けた。1883年1月帰国するまでの日本滞在期間は約2年間であり(この内留学生生活は一年半)、日本語が自由に使えたという。英語ができなかった彼が遣美使節団の一員として選ばれたのは日本語と朝鮮語による英語の二重通訳をするのに適任者であったからであると思われる。遣美使節団の帰国後アメリカに残り、韓国人最初の美国留学生となったということはすでに書いた通りである。

3. 1.6. 高永喆(1853－？)

高永喆は中国語訳官出身で、1876年の科挙に合格している。[注8](#)) 1881年9月朝鮮政府が中国に留学生を派遣する時、「学徒」として選ばれ中国に派遣されてる。1882年2月から天津にある「語学局」に入学し、中国語と英語を習った。「語学局」に留学中、彼はすでに漢文と中国語ができていたのでは主に英語の勉強をしたという。高永喆は遣美使節団員の中で唯一英語が使える人であった。アメリカから帰ってからは統理通商事務衙門の傘下にある「同文学」の「主事」となり、外国語の通訳を養う仕事に関わった。

3. 1.7. 邊燧(1861－1891)

邊燧は訳官の子孫で、父と祖父も訳官であった。1882年3月金玉均が朝鮮政府の使節として日本に派遣された時、金玉均の随員として渡日し、5ヶ月間日本に滞在した。1882年8月、朴泳孝が朝鮮政府の全権として訪日した時も朴泳孝の随員として訪日し、1883年3月まで7ヶ月間日本に滞在した。邊燧はもともと訳官の家庭で育っており、また語学に才能があって遣米使節団に参加した時は日本語が大変達者になっていたという。

3. 1.8. 玄興澤(生没年代未詳)

玄興澤は武官で、外交使節団には必ず武官が含まれるという慣例に従って使節団の一員となった

と思われる。外国語能力についてはまだ分かっていないがおそらく漢文は読めただけで英語や日本語、中国語は理解できなかったと思う。

3. 1.9. 崔景錫(?－1886)

崔景錫は武官出身である。武官の場合は使節団の安全を守り、軍事問題に興味を持つのが普通であろうが、崔景錫はアメリカに渡った時、主にアメリカの農業に関心を示して多くの農場や牧場などを視察している。帰国後アメリカの農業技術を受け入れ、朝鮮の農業を近代化する努力をした。外国語の能力についてはまだ分からない。当時の普通の役人と同じように漢文以外の外国語能力はなかったと思われる。

3. 1.10. 吳礼堂(?－1912)

吳礼堂はスペイン駐在清国公使館の書記官出身で、英語とスペイン語が達者な人であった。妻はスペイン人である。李鴻章の推薦で1882年12月から朝鮮政府の顧問となったPaul G. Möllendorff(朝鮮名: 穆麟德)の推薦で朝鮮に入り、遣美使節団の一員としてアメリカへ行く前は仁川税関に勤めていた。遣美使節団の任務が終わってからも中国に帰らずに仁川に永住した。朝鮮にいた間に大金持ちになり、邸宅をいまだに残している。[注9\)](#)

3. 1.11. 宮岡恒次郎(生没年代未詳)

Percival Rowelが個人的に雇った人であり、当時17歳であった。Percival Rowelがアメリカの国務長官に報告した遣美使節団の名簿に彼の名前は入っていないことを考えると彼は公式随行員ではなかったと思われる。英語が非常にうまくて日本語と韓国語とを使って英語を二重通訳するために雇われた人である。

3.2. 言語別

前述した通り遣美使節団はあわせて11人という小人数であったが、使用言語は英語、中国語、日本語、韓国語など四つもあった。書き言葉であった漢文まで数えると使用言語は実際は五つにも上る。ここでは各言語別に誰が何語をどのくらいできたかを見てみることにする。まず韓国語であ

るが、Percival Rowelや呉礼堂、宮岡恒次郎など3人以外は韓国語使用者である。これらの3人の外国人は韓国語を全く知らなかった。中国語の場合は呉礼堂一人のみが中国語母語話者で、他は韓国人高永喆が中国語を理解していた。閔泳翊の場合は中国に3ヶ月間滞在したことがあるので簡単な会話ぐらゐは中国語を理解したかもしれない。日本語の母語話者は宮岡恒次郎一人であるが、使える人は割合多い。8人の韓国人使節団員のうち、兪吉濬と除光範、邊燧は自由に日本語が使える、閔泳翊と洪英植も相当の日本語能力を持っていたと思われる。Percival Rowelは遣美使節団に参加した時は来日して3ヶ月しか経っていなかったもので十分な日本語力を持っていたとは言いがたい。次は最も重要な英語であるが、英語使用可能者は3人であった。Percival Rowelは英語母語話者であるし、英語通訳として雇われた呉礼堂と宮岡恒次郎も英語が達者な人であった。ところが8人の韓国人の場合は高永喆一人のみが中国で約1年間英語を習っただけで他は英語力を持っている人がいなかった。以上のことを整理して表にすると＜表―2＞のようになる。

＜表―2＞ 遣美使節団員の言語能力

氏名	英語	日本語	中国語	韓国語	漢文
閔泳翊		○	△	◎	◎
洪英植		○		◎	◎
除光範		◎		◎	◎
兪吉濬		◎		◎	◎
高永喆	○		◎	◎	◎
邊燧		◎		◎	◎
玄興澤				◎	◎
崔景錫				◎	◎
Percival Rowel	◎	△			

呉礼堂	◎		◎		◎
宮岡恒次郎	◎	◎			?

※ ◎:よくできた ○:大体できた △:すこしできた 空欄:できなかった

結局自由にそれぞれの言語を自由に使えた人は、英語3人、日本語4人、中国語2人、韓国語8人であったということが分かる。

4. 遣米使節団の通訳問題

4.1. 通訳はいつ必要か

二つ以上の異なった言語話者が話をしている、一方が他方の言語を知らない場合、双方が意思疎通をするには通訳する人が必要となる。遣米使節団には英語、中国語、日本語、韓国語の四つの言語話者がいたし、アメリカへ着いてからは各地で大勢のアメリカ人に会う機会があったので通訳の必要が少なくなかったと思う。また遣米使節団の最終的な目的はアメリカ大統領に朝鮮の国書を渡し、米朝間の友好と親善を願う朝鮮国王の意思を伝えることだったので外交的儀式や公の場での通訳も多かっただろうと思う。そこで、ここでは遣米使節団の通訳について、使節団内部の問題と公の場面での問題を考慮に入れて各言語間の通訳の問題について考えてみたいと思う。

4.2. 各言語間の通訳

遣米使節団内部の人的構成やアメリカでの活動などを考えると、言語間の通訳は次のようなものが考えられる。

- 英韓・韓英語の通訳
- 日韓・韓日語の通訳
- 中韓・韓中語の通訳

使節団内部の使用言語の数から見ると日中・中日語の通訳も考えられるが、日本人宮岡恒次郎

や中国人呉礼堂が二人とも英語の通訳だったので実際には日本語と中国語との通訳が行われた可能性は低い。ということで本稿では 英韓・韓英語の通訳など三つのタイプの通訳について詳しく見てみたいと思う。

4. 2.1 英韓・韓英語の通訳

英韓・韓英語の通訳は、使節団内部での通訳とアメリカで活動中の通訳に分けて考える必要がある。まず、使節団内部での通訳は、朝鮮側の使節と案内役のPercival Rowelの間での通訳が中心になっていたと思われる。案内役の立場から見ると、いつも朝鮮の使節に旅行の日程や連絡、交通機関を利用、食事、アメリカに上陸して大統領に会うまでの日程、外交の慣例や行事についての説明などを朝鮮側に伝える必要があっただろうし、場合によっては朝鮮側の意見を聞いて調整する必要があったと思われる。当時朝鮮側の使節には高永喆のみがある程度英語が話せたが自由に通訳ができるほどではなかったようである。だとすると英韓・韓英語両語の通訳は日本語と韓国語による通訳か、中国語と韓国語による二重通訳をする方法が有力になる。筆者は、簡単な内容なら高永喆とPercival Rowelの間にコミュニケーションが行われた可能性があるが、大事な話は日本語と中国語による二重通訳の方法を取っただろうと思っている。図で英韓・韓語語の通訳の方法及び過程を示すと次のようになる。

<図－1>

Percival Rowel ↔ 高永喆 ↔ 朝鮮の使節 (英語) (韓国語)
Percival Rowel ↔ 宮岡恒次郎 ↔ 兪吉濬・邊燧・除光範 ↔ 朝鮮の使節 (英語) (日本語) (韓国語)
Percival Rowel ↔ 呉礼堂 ↔ 高永喆 ↔ 朝鮮の使節 (英語) (中国語) (韓国語)

一方、アメリカに上陸してからの英韓・韓英通訳は、どこかで有力者に会ったり、公の場を訪問したり、外交儀式に参加したりしてスピーチをするなど、色々なケースが想定される。遣米使節団は、2.3の「使節団の日程及び歴訪コース」から見たように、アメリカに上陸して活発な動きを見せている。これらの場合も英韓・韓英語の通訳は＜図－1＞の流れと別に変われないと思う。違ってくるのは英語話者が別の英語話者が加わっただけである。アメリカ上陸してからの通訳の形を図にすると、＜図－2＞のようになる。

＜図－2＞

Rowel＋	アメリカ人英語話者	↔	宮岡恒次郎	↔	兪吉濬・邊燧・除光範	↔	朝鮮の使節
	(英語)		(日本語)		(韓国語)		
	アメリカ人日本語通訳 ↔ 兪吉濬・邊燧・除光範 ↔ 朝鮮の使節						
			(日本語)		(韓国語)		
Rowel＋	アメリカ人英語話者	↔	呉礼堂	↔	高永喆	↔	朝鮮の使節
	(英語)		(中国語)		韓国語)		

ここで一つ問題なるのは、呉礼堂を宮岡恒次郎のうち、誰に頼んで通訳させたかという点である。これについては記録が少ないので今のところのはっきりしたことは分からないが、可能性としては日本人宮岡恒次郎の出番が呉礼堂よりは多かっただろうと考えられる。その理由としては次の点が挙げられる。まず言えることは、宮岡恒次郎は使節団の案内役Percival Rowelの個人秘書だったのでRowelにとっては仕事が頼みやすいということである。次に、韓国人使節団員8人のうち5人は日本語が分かっていたという点も一つの理由になると思う。日本語が分かる人が多いということはやはり通訳の機会が増えるのではないだろうか。もう一つの理由をあげるなら中国人通訳呉礼堂の使節団内部での立場である。呉礼堂は前述した朝鮮の外交顧問Paul G. Möllendorffが推薦した人である。Paul G. Möllendorffは李鴻章の推薦で朝鮮に来ている人で、李鴻章の影響から逃れることので

きない立場にあった。李鴻章は米韓の修交には賛成したが朝鮮政府の遣米使節団の派遣には反対したのである。遣米使節団の立場から見ると呉礼堂の後ろに構えているPaul G. Möllendorffと李鴻章が気になっていたはずである。さらに当時日本と中国の間には米韓の修交交渉を巡って競争関係にあったという点も指摘できる。中国はあくまで米朝の修交を通して朝鮮半島での日本とロシアの勢力を牽制しようとし、日本は米朝間の修交を通して朝鮮から中国の影響力を減らすことを考えていたのである。日本政府が推薦し、それで日本に好意的であったPercival Rowelがこのような日中間の身妙な立場を感じていたら大事な場面では呉礼堂に通訳を頼むことが難しかったと思われる。しかし、このような理由は筆者の推測に過ぎず、本当のことは今後の調査を待つしかない。

4. 2.2. 日韓・韓日語の通訳

日韓・韓日語の通訳は、＜図－1＞と＜図－2＞の一部か、あるいは英語話者が省略された形である。英語の通訳であった宮岡恒次郎は実際に中国人呉礼堂より通訳出番が多かったと思われるので、それに伴って日韓・韓日語の通訳の機会も多かっただろうと思う。4. 2.4の 通訳の実例を見てみるとアメリカ人日本語通訳が朝鮮の使節に日本語で直接話す場面の出ている。韓・韓日語の通訳の流れを図にすると＜図－3＞のようになる。

＜図－3＞ 日韓・韓日語の通訳の過程

(英語話者) ↔ 宮岡恒次郎 ↔ 兪吉濬・邊燧・除光範 ↔ 朝鮮の使節		
(英語)	(日本語)	(韓国語)
アメリカ人日本語通訳 ↔ 兪吉濬・邊燧・除光範 ↔ 朝鮮の使節		
	(日本語)	(韓国語)

4. 2.3. 中韓・韓中語の通訳

中韓・韓中語の通訳は、英韓・韓英語の通訳から派生されたものである。中韓・韓中語の通訳のプロセスを図にすると＜図－4＞のようになる。

＜図－4＞ 中韓・韓中語の通訳のプロセス

(英語話者) ↔ 吳礼堂 ↔ 高永喆 ↔ 朝鮮の使節
(英語) (中国語) (韓国語)

4. 2.4. 通訳についての実際の記録

遣米使節団関連記録の中に実際の通訳の様子を記録したものは少ない。ここではこれまで見つかった通訳関連記録をいくつか紹介したい。注10)

実例1: 国書奉呈式での通訳 (*New York Herald*, September 19, 1883)

○ 奉呈式の日: 1883年9月18日午前11時

○ 場所: Fifth Avenue Hotelの一階大接見室

○ 式順: ◇ Chester A. Arthur大統領が待っている大接見室に朝鮮の使節団が一行に入場。

◇ 朝鮮の使節がChester A. Arthur大統領に平伏して礼をする。これに対して
Chester A. Arthur大統領は頭を若干下げて答礼。

◇ 全権大臣閔泳翊が朝鮮の国書及び信任状をArthur大統領に渡す。

◇ 全権大臣閔泳翊が韓国語でスピーチをする。韓国語のスピーチを使節団
の随員兪吉濬が日本語に直し、これを宮岡恒次郎は英語に通訳。

◇ Arthur大統領が英語で答辞。

◇ 宮岡恒次郎がArthur大統領の答辞を日本語に訳し、これを随員兪吉濬が韓国
語に訳す。

国書奉呈式では英韓・韓英語の通訳に日本語及び韓国語が使われた。

実例2: York州知事訪問記事 (*New York Herald*, September 28, 1883)

*New York Herald*の記事には珍しくアメリカ人通訳者の話が出ている。アメリカ人通訳が話の内容

(英語)を日本語に訳して従事官徐光範に伝え、今度は徐光範が日本語の内容を韓国語に直して副全権大臣洪英植に伝えた。洪英植はこれを全権大臣閔泳翊に伝えたという記事である。

実例3:New York市役所訪問記事(New York Herald, September 28,1883))

Edison市長が英語で歓迎のスピーチをしたら全権大臣閔泳翊は用意された答辞を韓国語で読み上げたという記事である。この時閔泳翊の答辞を英語に通訳した人は遣米使節団の迎接官役であったJorge C. Foulk少尉だったという。Foulk少尉は韓国語が分からなかったので 閔泳翊のスピーチを直接訳したとは思えない。誰かが英語で訳しておいた原稿を読み上げたと思われる。

5. 遣米使節団が韓国語の英語教育に与えた影響

遣米使節団の派遣がもたらした政治的・文化的影響は少なくない。これらの影響をいくつか挙げると次の通りである。まず言えることは朝鮮政府の対米認識が変わるきっかけとなったという点である。当時朝鮮の対米認識は、1866年の「General Shurman号」事件や1871年のアメリカの朝鮮侵略などで非常に悪化しており、敵対感さえ感じるところまでになっていた。ところが、遣米使節団の派遣でアメリカが平和を愛している文明国家であることを知ってからは朝鮮の対米認識は好意的に変わるのである。次は文化的な影響であるが、遣米使節団はアメリカの教育制度や農業技術、郵便制度などに刺激を受け、これらの制度や技術を受け入れたいという気持ちを持って帰った。後日朝鮮政府はアメリカから外交顧問や軍事教官、教師などを招聘しており、これらの措置を通して朝鮮の政治や軍事、教育の近代化を図ろうとした。

遣米使節団の派遣がもたらした影響のうち、本稿で特に注目したいのは英語教育に与えた影響である。すでに述べたように、遣米使節団の派遣においては通訳問題は大変重大な課題であった。朝鮮政府は他に方法がないので中国人通訳を雇って中国語と韓国語による二重通訳を考えるわけであるが、二重通訳の不便さはずいぶん痛感したはずである。そこで朝鮮政府は英語の通訳者を養成することにし、そのため英語の教育機関を作ることにしたのである。朝鮮は古くから外国語教育を重視し、13世紀後半高麗時代には「通文館」という外国語教育機関を作って、中国

語や蒙古語、日本語などを教えており、1392年に国を開いた朝鮮国の場合も1392年から「司訳院」という外国語教育機関を作って中国語や蒙古語、日本語、満州語などを教え、外国語専門家を養成した。**注11)** この「司訳院」では中国語など朝鮮の近隣諸国の言語のみが教育され、西洋語は教えていなかった。ところが時代が変わって、朝鮮に英語など西洋語の教育が必要となったのである。

英語の教育機関を作る計画はすぐ実行に移された。遣米使節団がまだアメリカにいた頃1983年9月、朝鮮政府は「通商衙門」(今日の外務省に当たる)の付属機関として「同文学」という外国語教育機関を作る。この「同文学」は中国の外国語教育機関である「同文館」を真似たもので、ここで英語や日本語などを教えた。教師は当時朝鮮政府の外交顧問であった Paul Georg von Möllendorf の推薦で中国人二人とイギリス人一人を招聘した。「同文学」の招聘された外国人教師はイギリス出身で電気通信技術者であった T.E.Halifax と中国人呉仲賢(New York大学出身)唐紹威(Columbia大学出身)の3人であった。「同文学」の設立目的は朝鮮政府の外国語通訳の養成にあった。学生数は29人ー40人ぐらいであったという **注12)**。

この「同文学」は、1886年9月に近代的官立学校である「育英公院」(Royal English School)が設立されることによって「育英公院」に吸収された。「育英公院」は1883年遣米使節団の団長であった閔泳翊の建議により作られたもので、予定より少し遅れたが1886年9月23日に開校した。

注13) 教師はアメリカ公使館の協力でアメリカ本土から招聘された。その時招聘された人は、H. B. Hulbert(韓国名:訖法)、G. W. Gilmore(韓国名:吉毛)、(D. A. Bunker(韓国名:方巨)の三人である。授業はアメリカ英語で行われ、教科書も英語で書かれた教科書が使われた。クラスは二つで、一つは若い役人を入れ、もう一つには高官の子弟や高官の推薦を受けた人を入れた。一クラスの学生の人数は10人ぐらいで、学生の年齢は15歳ー20歳だったという。最初は学生たちに熱意があり、1年間で英語の単語を3000語くらい覚えるなど、英語の教育が割合うまくいったが、財政の不足や運営の未熟などで1894年に閉校した。1894閉校年までに入学した学生は107名だった。このように韓国の英語教育は米国への使節団の派遣がきっかけとなっているのである。

6. 終わりに

以上、朝鮮政府が 1883 年に米国に送った使節団と英語の通訳問題について見てきた。本稿を通して、最初の遣米使節団の英語の通訳は二重通訳だったということと、二重通訳の場合日本語を通しての二重通訳が多かったということが分かっていただけたと思う。

本稿は筆者の最近の研究テーマである「19 世紀末朝鮮における外国語の教育及び通訳人の養成」の基礎的研究であるが、これから補わなければならない点が少なくない。今度はアメリカの外交文書や当時の新聞記事などを調べる予定であり、いい資料が見つかることを期待している。

<韓美関係年表>

1851 年 アメリカの捕鯨船 South America が釜山の近くに漂着。朝鮮の役人(通訳)が中国語と日本語、漢文を使いコミュニケーションを図ったが失敗。We are from America → 「旡里界」

1855年 アメリカの捕鯨船Two Brothers号が韓国東海岸に漂着。4人の船人を救助し、清の北京に送還。韓国に上陸した初めてのアメリカ人。筆談の内容及びローマ字を写した記録が残っている。

1865年 アメリカ人3名が慶尚道の迎日湾に漂着

1866年 アメリカ船「士仏号」が釜山に来て、朝鮮政府に通商関係の樹立を要求する。朝鮮政府は断る。

1866年5月 アメリカ船「Surprice号」が韓国平安道鉄山に漂着。

1866年7月11日 アメリカ船「General Shurman号」平壤の近くに停泊、通商を要求。朝鮮側が断る。
7月24日「General Shurman号」焼かれる。

1866年8月12日 フランス軍東洋艦隊ローズ(P. G. Roze)提督、第一次侵入。8月22日退却。

1866年9月6日 フランス軍東洋艦隊ローズ(P. G. Roze)提督、第二次侵入。10月5日退却。

1867年4月 Hamilton Fish国務長官が朝鮮遠征を命じる。John Rodgers司令官の艦隊が5月31日

に京畿道の勾欄島到着。朝鮮側が3人の役人旗艦Coloradoに派遣、来航の目的などを聞く。

1871年6月1日 朝鮮側アメリカ軍艦2隻に発砲。6月10日アメリカ軍草芝鎮に上陸、朝鮮側が敗北。

7月3日アメリカ艦隊帰還。

1880年5月3日 R.W.Shufeldt提督が釜山に来航、朝鮮の開港を打診したが、朝鮮側が断る。

1882年 William E. Griffisが*Corea: The Hermit Nation*を刊行

1882年5月12日 R.W.Shufeldt提督が美朝修交交渉のため仁川に来航。**中国人通訳2人を連れて来る。**

5月22日 朝美修交条約締結(漢文本3通、英文本3通)※ R.W.Shufeldt提督が朝鮮の代表に英語教育の必要性を強調、アメリカに留学生の派遣を要望。

1883年4月 アメリカは初代駐韓公使にLucius H. Foote(福德)を任命。同年5月13日仁川に入港。

尹致昊を通訳として採用。尹はまだ英語が十分ではなかったので井上馨外相の個人秘書である斉藤修一郎を英語の通訳として連れて来る。

1883年7月9日 朝鮮政府がアメリカに使節団を派遣することを最終決定

1883年7月16日 遣米使節団がアメリカの軍艦Monocasyに乗船、仁川を出発。21日に長崎到着。

日本の郵便船で横浜へ。1883年8月18日商船Arabicに乗り、太平洋横断、9月2日サンフランシスコ到着。9月15日Washington到着。9月18日アメリカ大統領に国書を渡す。

1883年12月 兪吉濬は帰国しないで留学生として残る。(最初のアメリカ留学生)

1884年6月2日 遣米使節団帰国

1887年11月12日 駐美全権公使朴定陽アメリカに赴任するためソウル出発(総11名)。

注

1) 金源模(2002) 韓美外交関係 100 年史(哲学斗現実社)の pp.37-38 を参照

2) 1866 年 7 月アメリカの商船 General Shurman 号が平壤に来航して朝鮮側と衝突し、船が焼かれた事件。

- 3) 1871 年アメリカ側が General Shurman 号事件などを理由に、朝鮮を開港させようと侵略した事件
- 4) 金源模(2002)の pp.132－133 による
- 5) 兪吉濬のアメリカ留学については、李光麟(1985)の『韓国開化史研究』に詳しい論考がある
- 6) 金源模(2002)の pp.397－409 による
- 7) 兪吉濬については、尹炳喜(1998) 兪吉濬研究、国学資料院を参照
- 8) 『譯科譜單 醫譯籌八世譜人』に「高永喆 明允 癸丑 丙子式 鎮豊」とある
- 9) 吳礼堂については、金源模(2002)の pp.375－397 を参照
- 10) 遣米使節団の通訳のについての記事は、*New York Times*, *New York Daily Tribune*, *New York Herald* などアメリカの新聞にいくつか見える。
- 11) 李漢燮(2006) 韓国における日本語辞書について、日本語辞書学の構築、おうふう、pp256-257を参照
- 12) Oryang Kwon(1997), “Korea’s English Teacher Training and Retraining: A New History in the Making,” 영어교 54-4.
- 13) 「育英公院」の設立については、李光麟(1985)の『韓国開化史研究』の pp.103-158 に詳しい論考がある

参考文献

- Oryang Kwon(1997), “Korea’s English Teacher Training and Retraining: A New History in the Making,” 영어교 54-4
- Percival Rowel(2001) 내 기억 속의 조선, 조선 사람들(조경자 역)
- 金明培(1981), 「佐翁 尹致昊博士의 英學」 『錦浪文化論叢 錦浪魯錫經先生 華甲紀念論文集』, 한국민중출판사
- 金明培(1980), 「開化期の 英語」 『月刊英語』, 1980年
- 金源模(1999) 韓美修交史、哲学과現實社
- 金源模(2002) 韓美外交關係100年史、哲学과現實社
- 金源模(2003) 開化期韓美交渉關係史、檀国大学校出版部

文一平(1975) 韓美五十年史、探究堂

朴星来(2002) 「한글의 보급과 한글의 한글화 -1885년 이후-」(『한글의 한글화』16(韓國外國語大學 歷史文化研究所)

培材高等學校(1955), 培材史, 培材高等學校編

卞鍾和(1982), 「1883年의 韓國使節團의 北洋訪問과 韓美 科學技術 交流의 發端」 『한글의 한글화』4-1, 한글의 한글화

石堂(1935)、70年前의 外國語文獻、新東亜 1935年10月号

심연하(1967) 梨花女大와 淑明女大, 希望出版社

尹炳喜(1998) 兪吉濬研究、国学資料院

윤성민(2004), 도포입고 ABC 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1050 1051 1052 1053 1054 1055 1056 1057 1058 1059 1060 1061 1062 1063 1064 1065 1066 1067 1068 1069 1070 1071 1072 1073 1074 1075 1076 1077 1078 1079 1080 1081 1082 1083 1084 1085 1086 1087 1088 1089 1090 1091 1092 1093 1094 1095 1096 1097 1098 1099 1100 1101 1102 1103 1104 1105 1106 1107 1108 1109 1110 1111 1112 1113 1114 1115 1116 1117 1118 1119 1120 1121 1122 1123 1124 1125 1126 1127 1128 1129 1130 1131 1132 1133 1134 1135 1136 1137 1138 1139 1140 1141 1142 1143 1144 1145 1146 1147 1148 1149 1150 1151 1152 1153 1154 1155 1156 1157 1158 1159 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 1170 1171 1172 1173 1174 1175 1176 1177 1178 1179 1180 1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187 1188 1189 1190 1191 1192 1193 1194 1195 1196 1197 1198 1199 1200 1201 1202 1203 1204 1205 1206 1207 1208 1209 1210 1211 1212 1213 1214 1215 1216 1217 1218 1219 1220 1221 1222 1223 1224 1225 1226 1227 1228 1229 1230 1231 1232 1233 1234 1235 1236 1237 1238 1239 1240 1241 1242 1243 1244 1245 1246 1247 1248 1249 1250 1251 1252 1253 1254 1255 1256 1257 1258 1259 1260 1261 1262 1263 1264 1265 1266 1267 1268 1269 1270 1271 1272 1273 1274 1275 1276 1277 1278 1279 1280 1281 1282 1283 1284 1285 1286 1287 1288 1289 1290 1291 1292 1293 1294 1295 1296 1297 1298 1299 1300 1301 1302 1303 1304 1305 1306 1307 1308 1309 1310 1311 1312 1313 1314 1315 1316 1317 1318 1319 1320 1321 1322 1323 1324 1325 1326 1327 1328 1329 1330 1331 1332 1333 1334 1335 1336 1337 1338 1339 1340 1341 1342 1343 1344 1345 1346 1347 1348 1349 1350 1351 1352 1353 1354 1355 1356 1357 1358 1359 1360 1361 1362 1363 1364 1365 1366 1367 1368 1369 1370 1371 1372 1373 1374 1375 1376 1377 1378 1379 1380 1381 1382 1383 1384 1385 1386 1387 1388 1389 1390 1391 1392 1393 1394 1395 1396 1397 1398 1399 1400 1401 1402 1403 1404 1405 1406 1407 1408 1409 1410 1411 1412 1413 1414 1415 1416 1417 1418 1419 1420 1421 1422 1423 1424 1425 1426 1427 1428 1429 1430 1431 1432 1433 1434 1435 1436 1437 1438 1439 1440 1441 1442 1443 1444 1445 1446 1447 1448 1449 1450 1451 1452 1453 1454 1455 1456 1457 1458 1459 1460 1461 1462 1463 1464 1465 1466 1467 1468 1469 1470 1471 1472 1473 1474 1475 1476 1477 1478 1479 1480 1481 1482 1483 1484 1485 1486 1487 1488 1489 1490 1491 1492 1493 1494 1495 1496 1497 1498 1499 1500 1501 1502 1503 1504 1505 1506 1507 1508 1509 1510 1511 1512 1513 1514 1515 1516 1517 1518 1519 1520 1521 1522 1523 1524 1525 1526 1527 1528 1529 1530 1531 1532 1533 1534 1535 1536 1537 1538 1539 1540 1541 1542 1543 1544 1545 1546 1547 1548 1549 1550 1551 1552 1553 1554 1555 1556 1557 1558 1559 1560 1561 1562 1563 1564 1565 1566 1567 1568 1569 1570 1571 1572 1573 1574 1575 1576 1577 1578 1579 1580 1581 1582 1583 1584 1585 1586 1587 1588 1589 1590 1591 1592 1593 1594 1595 1596 1597 1598 1599 1600 1601 1602 1603 1604 1605 1606 1607 1608 1609 1610 1611 1612 1613 1614 1615 1616 1617 1618 1619 1620 1621 1622 1623 1624 1625 1626 1627 1628 1629 1630 1631 1632 1633 1634 1635 1636 1637 1638 1639 1640 1641 1642 1643 1644 1645 1646 1647 1648 1649 1650 1651 1652 1653 1654 1655 1656 1657 1658 1659 1660 1661 1662 1663 1664 1665 1666 1667 1668 1669 1670 1671 1672 1673 1674 1675 1676 1677 1678 1679 1680 1681 1682 1683 1684 1685 1686 1687 1688 1689 1690 1691 1692 1693 1694 1695 1696 1697 1698 1699 1700 1701 1702 1703 1704 1705 1706 1707 1708 1709 1710 1711 1712 1713 1714 1715 1716 1717 1718 1719 1720 1721 1722 1723 1724 1725 1726 1727 1728 1729 1730 1731 1732 1733 1734 1735 1736 1737 1738 1739 1740 1741 1742 1743 1744 1745 1746 1747 1748 1749 1750 1751 1752 1753 1754 1755 1756 1757 1758 1759 1760 1761 1762 1763 1764 1765 1766 1767 1768 1769 1770 1771 1772 1773 1774 1775 1776 1777 1778 1779 1780 1781 1782 1783 1784 1785 1786 1787 1788 1789 1790 1791 1792 1793 1794 1795 1796 1797 1798 1799 1800 1801 1802 1803 1804 1805 1806 1807 1808 1809 1810 1811 1812 1813 1814 1815 1816 1817 1818 1819 1820 1821 1822 1823 1824 1825 1826 1827 1828 1829 1830 1831 1832 1833 1834 1835 1836 1837 1838 1839 1840 1841 1842 1843 1844 1845 1846 1847 1848 1849 1850 1851 1852 1853 1854 1855 1856 1857 1858 1859 1860 1861 1862 1863 1864 1865 1866 1867 1868 1869 1870 1871 1872 1873 1874 1875 1876 1877 1878 1879 1880 1881 1882 1883 1884 1885 1886 1887 1888 1889 1890 1891 1892 1893 1894 1895 1896 1897 1898 1899 1900 1901 1902 1903 1904 1905 1906 1907 1908 1909 1910 1911 1912 1913 1914 1915 1916 1917 1918 1919 1920 1921 1922 1923 1924 1925 1926 1927 1928 1929 1930 1931 1932 1933 1934 1935 1936 1937 1938 1939 1940 1941 1942 1943 1944 1945 1946 1947 1948 1949 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024 2025 2026 2027 2028 2029 2030 2031 2032 2033 2034 2035 2036 2037 2038 2039 2040 2041 2042 2043 2044 2045 2046 2047 2048 2049 2050 2051 2052 2053 2054 2055 2056 2057 2058 2059 2060 2061 2062 2063 2064 2065 2066 2067 2068 2069 2070 2071 2072 2073 2074 2075 2076 2077 2078 2079 2080 2081 2082 2083 2084 2085 2086 2087 2088 2089 2090 2091 2092 2093 2094 2095 2096 2097 2098 2099 2100 2101 2102 2103 2104 2105 2106 2107 2108 2109 2110 2111 2112 2113 2114 2115 2116 2117 2118 2119 2120 2121 2122 2123 2124 2125 2126 2127 2128 2129 2130 2131 2132 2133 2134 2135 2136 2137 2138 2139 2140 2141 2142 2143 2144 2145 2146 2147 2148 2149 2150 2151 2152 2153 2154 2155 2156 2157 2158 2159 2160 2161 2162 2163 2164 2165 2166 2167 2168 2169 2170 2171 2172 2173 2174 2175 2176 2177 2178 2179 2180 2181 2182 2183 2184 2185 2186 2187 2188 2189 2190 2191 2192 2193 2194 2195 2196 2197 2198 2199 2200 2201 2202 2203 2204 2205 2206 2207 2208 2209 2210 2211 2212 2213 2214 2215 2216 2217 2218 2219 2220 2221 2222 2223 2224 2225 2226 2227 2228 2229 2230 2231 2232 2233 2234 2235 2236 2237 2238 2239 2240 2241 2242 2243 2244 2245 2246 2247 2248 2249 2250 2251 2252 2253 2254 2255 2256 2257 2258 2259 2260 2261 2262 2263 2264 2265 2266 2267 2268 2269 2270 2271 2272 2273 2274 2275 2276 2277 2278 2279 2280 2281 2282 2283 2284 2285 2286 2287 2288 2289 2290 2291 2292 2293 2294 2295 2296 2297 2298 2299 2300 2301 2302 2303 2304 2305 2306 2307 2308 2309 2310 2311 2312 2313 2314 2315 2316 2317 2318 2319 2320 2321 2322 2323 2324 2325 2326 2327 2328 2329 2330 2331 2332 2333 2334 2335 2336 2337 2338 2339 2340 2341 2342 2343 2344 2345 2346 2347 2348 2349 2350 2351 2352 2353 2354 2355 2356 2357 2358 2359 2360 2361 2362 2363 2364 2365 2366 2367 2368 2369 2370 2371 2372 2373 2374 2375 2376 2377 2378 2379 2380 2381 2382 2383 2384 2385 2386 2387 2388 2389 2390 2391 2392 2393 2394 2395 2396 2397 2398 2399 2400 2401 2402 2403 2404 2405 2406 2407 2408 2409 2410 2411 2412 2413 2414 2415 2416 2417 2418 2419 2420 2421 2422 2423 2424 2425 2426 2427 2428 2429 2430 2431 2432 2433 2434 2435 2436 2437 2438 2439 2440 2441 2442 2443 2444 2445 2446 2447 2448 2449 2450 2451 2452 2453 2454 2455 2456 2457 2458 2459 2460 2461 2462 2463 2464 2465 2466 2467 2468 2469 2470 2471 2472 2473 2474 2475 2476 2477 2478 2479 2480 2481 2482 2483 2484 2485 2486 2487 2488 2489 2490 2491 2492 2493 2494 2495 2496 2497 2498 2499 2500 2501 2502 2503 2504 2505 2506 2507 2508 2509 2510 2511 2512 2513 2514 2515 2516 2517 2518 2519 2520 2521 2522 2523 2524 2525 2526 2527 2528 2529 2530 2531 2532 2533 2534 2535 2536 2537 2538 2539 2540 2541 2542 2543 2544 2545 2546 2547 2548 2549 2550 2551 2552 2553 2554 2555 2556 2557 2558 2559 2560 2561 2562 2563 2564 2565 2566 2567 2568 2569 2570 2571 2572 2573 2574 2575 2576 2577 2578 2579 2580 2581 2582 2583 2584 2585 2586 2587 2588 2589 2590 2591 2592 2593 2594 2595 2596 2597 2598 2599 2600 2601 2602 2603 2604